

神風會月次相撲番附合

911.3

力

一重六念下ね花り水懐る心

言々々々雪ふ道ふても梅匂を

教入の母ふ似るのふみり斗至

香あり唐崎の松ふ井の香香

そありふ不解るくの去年の寂心



三

初をまゝ集ふの初めはく桂の

尺定めて秀塔一歩ある物

何の形を海してはる一歩の水

空の向ひなき形を歩の形

香も尺の中やうん月の梅の紙

里旭

乞

空の向ひなき形を歩の形

ありのの中やうのり十二階

水音の向ひなき形を歩の形

今日も又海多や五月の風

来尺を海多の空の向ひなき

水音

雲御りもあも幼らぬわが心

梅井

阿波川の舟の若きかたの拾遺

雲御りやあも若くは海守

ふーとあまめ柳のふらね

舟のあまをよそにたのむ

一月の浮き舟もあまをよそに

あまの舟もあまをよそに

舟のあまをよそにたのむ

舟のあまをよそにたのむ

舟のあまをよそにたのむ

老松の浪連新下—文社路ハ

—先出下つ—この春の春の春

松をふ小備を夢や春の春先

方風を下下路をふ春の門

春春の—く—小春—春の鐘

春風を潜りのわけの啼鳩

隣—風を鳴る春の春の春

春の春の春の春の春の春

世を春の春の春の春の春

旭の春の春の春の春の春

東風吹雪、孫子、梅邊花

竹度り、風、あつち、梅、花、を、れ

吹、雪、を、も、風、は、澄、り、り、冬、の、月

風、の、雪、の、鐘、を、一、と、あ、る、人

岩、削、り、一、庭、の、雪、を、結、り、り

一止

お、静、か、雪、呼、く、あ、の、廊、下

雪、あ、る、富、十、代、の、跡、り、雪、花

梅、花、の、傾、伴、所、の、雪、花、を、も

黙、笑

筆、跡、一、我、の、雪、の、句、を、も、る

玉、の、雪、の、花、の、一、の、紙、の、寸、に、し、て

陽春の瓜節入水てふとむ今

行雨追えたり水り春の水

眉そのく余意の人と成りナリ

初旭の出れ籠の似あり神の松

陽春の調の紙手云保の松

乙字の紙以てけり留書の花

あめて減る唐の舞子目出る舞子

追相子の紙一とる雨を姉妹

空今の今紙の珠多入るる籠

入紙も如る紙もはる初紙の

此天

此天

此天

此天

河海の少なき、烟の美を葉心

糖の味誘ひ、如く水と香の神

雪解の流、水と香の神

歳節の流、水と香の神

九重の空、以て床に坐す様

之

其矣

鶴の鳴き、目も涙も水に

芽の出る、昨日も今日も春の枝

新入の一人、一人の心

書初め、信じて待つ、世を千代に

邪なき、心も神も相まらぬ

出代々一人前ハ成りあり

楽その十七文也の第 始

女氣を初そ有りあり柳

元日輝く禧を 國の花

あはれと 晴山在の君の志

牛飼の報徳教を如指を在

春風多吹りてあまの洲を

菜の毛の結えそ波さる古井筒

夕晴の甲より牡丹のほろのうねる

おとろの牛、波の長あはれ

蜜一ツ少庭の秋を深めたり

少舌の泡一杯の庭の

吐舌

夕顔のまゝ人なき時歌人止

却て心とあつて小石と

之

道に相念はる人た修心枯野

人新なるて杉柵のまをあり

大舟

さしゆの心を抱て来り千鳥

之

銀のて銀のね人

塗るふ切り心とありあは

新の流新の川細の流

段成りをもしと笑ひてくさゆ

山寺のほろ愈々始り細き付

寒く月より光る鏡に光る瓦

種をゆき雪敷もまはる小年の暮

食うて種りしと年の暮

中馬・張ひて果し雪の中

我形をよみそ鏡の仲者入り

一軍とうと問えん事と雪の中

秋塔のふゆ凍し冬月

冬の日もさきさきと下
鳥を

あつ雪ひそり〜と積りりり

何事も心の一字の雪の外

六藝より長け〜お世なめう始

細曳や一敬の力家め縁

伏見心宮指おあ〜二重橋

元日の紙〜斗り借用もゆき

西をき米のさおめ房蘇の席

何れあわくふもおとれ〜あふ今日

少隣降の隣おをなふ小園ま石のなる

そふふりのちるもせほ〜お最念

井戸

屠蘇の盃未の氣納めり

氣持よくくさ家庭掃出の松の内

如唐の道心さそふやまき葉掃

吹く風の音も目出さし飾り所

ふりそよぶ空の掃出の松飾り

思ひ立門の掃出の葉の掃

梅咲の葉ハ葉の香の清き忘

自掃りも忘れ掃えを清き地

まき柳の葉掃出の清き地

陰の地

及速心しと足馬しり所

吾らにぞす酒も飛ぶ——をのぶる

は舞湯の人物頭の新子長

如月の桂の小流のささく湯り

春の虫の廊の度りのささく檜

吟高

怪と合ふらあの日と梅あ——

余慶ある門は故郷の怪と私

山草のささく静うか人土うか

春水と所を離れ日あけ市場は

歌屋のささく想の春のうか

懐り合ふ物屋のせほし木肌うか

竹の影の入りたる

如月の影の小流のささるる溜り

春の空の廊の度りのささるる楹

吟

怪と念ふとあめの月の影あり

余慶ある門の故郷の懐と云

少事あるを静うか人上うか

春水と所を離れ月あけ市場に

歌屋の空をむ想ふ春のあけ

懐り念ふとあめの月の影あり

月あしこいんあしこいん廊の梅え

松の翠細あしこいん水少成鶴

乞の産のあしこいん入水括口の海

指あしこいん確子り記のさるるる

空あしこいんあしこいんと新撰らん

一極

何れあしこいんあしこいんあしこいん

風あしこいんあしこいんあしこいん

あしこいんあしこいんあしこいん

東徳

あしこいんあしこいんあしこいん

あしこいんあしこいんあしこいん

山とろりり〜残りホシ

考の月砂文とホシ

乞

十分の旬の残り

湖と足跡す別水

見事せん石方ひり

一極

梅とらんを

冬至

石の色を

一輪の

香る

三

東州の

花帯の今日も昨日の類つて

月あふり分り梅の花

庭を歩めり雪を山さると思ひ

鶴の立ち方へ連む心もなほ梅

初雪と思ひぬ程積りゆく

哲河

道程をなほ雪を紅雲なり

夕に初雪思ひぬ程梅の花

花笑川一を以てたのり水なり

春をなほたのり雪を山さると思ひ

雪の風匂ひあふると思ひたり

山

氣はゆるぎなき出ず船も去る月

世水

空を渡る又移り来る風

氣は晴しおちくさる舟の浮き沈み

氣は雨の降るを待つて舟もさるる

つと

船ありと揚心舟も沈む舟も去る

船の行く所は社頭の前

舟は船の如くあり居る所の

席

舟もよく行く所と見えては

盛大の社頭の舟も社地の出

西より来る舟も社地の出

かゝるゝの社頭の松の歌始ノ

御安心の流れとて西の一ノ

國の秘傳人不知の聲とうか

限り其手をも吉秘の秘秘

年寄りもうの水とは中心にんに

初高風の吹ぬ氷柱の影々とる

そろのたくうあれは石の土

苔々の昨葉の心の比ふられ

消しゆとんとして離れ切れ

堀の葉の下殿^傳の出りた

実く鏡の臺より見たる新雲

雲を海濱の波を曇る鏡の

石の波と雲と成りたり揚雲花

春もをぬ赤河の物之移りゆく

春ありふ濃多なる山の春の鏡

あや垢のけりね物を清む
子の日記

月影を清めそ春のさ花移りゆく

雪のりともりて紅梅より移りゆく

雲の波の岸の波を あり山

鏡の波のり移りゆくあり山

初志の襟 是をきり 終に粧

陽をよきもの 日掃く 意の先

急ぎの 雲うけ 後く 夢所は

動子 浮き 氷の ため 水 白

若くは 氷の ため 水 白

皆をむの 蕾 挿ひ や 雛の 友

台からく 雛を 作る 氷 海

乙子 名 舟 舟 登る 氷 海

海を 舟 押す 舟 登る 氷 海

初志の 扇 舟 登る 氷 海

冥居の日六姑一の初て高

あふみの頼む冷み一梅の花

去る日や一寸の物も後子多

降り母と田舎言ふふの枕りま

野の静さす初言をふふの風

あふのあふまふりしてあふ良空

采舞うそ雪割き顔の山か水

ふ中ハ流して氷の流をこ那

魁あふあふあふ人も嘆くあも

雄輝のあしては舞ハ如何と神

昔々もなほさきむすむ終る

静さの限りやほほ、残るは

こゝろ

静むれくあふのふせを柳

そふりてつゝのくさつとよ

春の心もあふ美るふと

うき世もあふ眼ふまぬ

け頭あふ山の空もあふ

猿引も酔てあふり

天を中

湖のつとをさかぬまう

東あそびをさかぬまう

蝶二つをりし さらしな 結水より

庭路の切れ結水よき 梅の影

気あふく長旅もあはよ 結水先

糸のもよあけ 結水よき 長くぬき

梅の影の影の影の影の影の影

よのよのよのよのよのよのよのよのよ

梅の影の影の影の影の影の影

結水の影の影の影の影の影の影

梅の影の影の影の影の影の影

結水の影の影の影の影の影の影

梅の影

酒よ出まじくは練練やまきの月

春風よあつれよ出まじく春のあ

徳くはれえをのちもやうあや山

是七日只西あくまがーり

あつれあやたふあを流ひあ

病よあはれあまをいひし

解あひあはれあはれあはれ

茶の心をよ上はあまやあ

舞あひあはれあまやあ

あまあひあはれあまやあ

風車

是酒

慈石にそよぶ方角の心ゆく後

心ゆく後世に動く事知れ

凡そ葉捨ふ如く心ゆく後

そよぶ心ゆく馬の心ゆく後

昔程の心ゆく心ゆく後

心ゆく

古程の心ゆく心ゆく後

梅の心ゆく心ゆく後

心ゆく心ゆく心ゆく後

心ゆく心ゆく心ゆく後

梅上の心ゆく心ゆく後

心ゆく

後等の上の終日啼き在 東川

子も寝不撫ききりり二日矣

長閑さゆかてのまゝにまゝに物

候の考れ里近由ありて

美の川と端めを醒るり船の碇

考れくわ七里の溪の船りり

考り候ふ月之海老桑の禱り

候者ゆへ候き空の候り生る

候も山も目録ふとめて考り候

苗も考りもあつて少く候り候

梅の香もあつた
梅の香もあつた

梅の香もあつた
梅の香もあつた

本三

梅の香もあつた
梅の香もあつた

梅の香もあつた
梅の香もあつた

梅の香もあつた
梅の香もあつた

馬の香もあつた
馬の香もあつた

梅の香もあつた
梅の香もあつた

梅の香もあつた
梅の香もあつた

梅の香もあつた
梅の香もあつた

梅の香もあつた
梅の香もあつた

馬場の中よその味香い風

あつと星の下あもあはせ出うを

襟と遠くはれり花らん 辰

あそふ花も足葉ありな梅り花

梅の香あをよき清の海あ風

梅の心え縁ふりの似合 けり

美しう映え標の宮のそな

無言語心却り浅く梅の葉をん

春のあゆみて二階の合アハセ美をり

初東風心定と吹ゆる筑波山

鞠明の心下ぬ香のあはれ

お持秀ふ立ッ湯殿を先ん

筑波屋敷を来り春の月

此山より春緒うけて春の月

梅の心え縁ふり
春のあゆみて二階の合美をり
初東風心定と吹ゆる筑波山
鞠明の心下ぬ香のあはれ
お持秀ふ立ッ湯殿を先ん
筑波屋敷を来り春の月
此山より春緒うけて春の月

梅を

梅朝網曳浦の籠へ一丈

茶

庭の咲く花の匂ふ 小の瀬川

花の匂ふ匂ふたやうそ花の月

夢の夕アとの旭の匂ふりあは

小娘の顔も咲く枕の酒

眼の笑ひはらふ友の糸箱緒

山崎の啼く鴉のまを誰ぞ

あはれりあはれ知り母の碑

籠の庭の十文を限りのたあるを

庭の咲く花の匂ふ何の神

小以尺。按。之。以。口。離。氣。

少。之。按。之。以。口。離。氣。

少。之。按。之。以。口。離。氣。

少。之。按。之。以。口。離。氣。

少。之。按。之。以。口。離。氣。

少。之。按。之。以。口。離。氣。

少。之。按。之。以。口。離。氣。

少。之。按。之。以。口。離。氣。

少。之。按。之。以。口。離。氣。

少。之。按。之。以。口。離。氣。

来々お世を振く子振の世願丸

第一系ふ二系あしして後世うね

り去の重きを産けり世道のを

眼の態も先ッ一幕の活生を

あふふまゝの希ふをまの希り

あふふまゝの希ふをまの希り

病の念



本末(文)下

九重如
黙笑



中
成

言
成
産
糧

人
新
若
舟



乃
其
拈
聖
の

名
の
行
り

る



一様

人



人

形

見

春日の月



東僊

の



白

氣 紀 年 車 水

江 戸 文 以 船 又

春 日 巳 日 巳 車 子 河

春 月 一 風 車

流 石 乃 也

京 乃 也

風車

風車

たの気丸

笑ふ心

旗

車川

花

花

成化

十二

送

光

送位

解

静さの

陽ひ

蝶ちょう

蝶ちょう

五の

裁
滿
比

流
如
了

清

春
の
水

野
矢





大いひの

あ

糸舟

お

あ

千





軸

足る部

一了

花





